

学問とは何か？

21世紀を担う若者に伝えるべき学問とは何か？

従来の学問分野（ディシプリン）の内因性

これまで少なくとも高等教育においては、研究と教育は車の両輪のように「軌を一に」して学問分野を形成していた。ある学問分野を推進するために、その分野に蓄積されて知見と方法論を継承していくことが、教育の内容であった。このように研究と教育が同じ視点で分野分けをしたものを「ディシプリン」と呼ぶことにしよう。「ディシプリン」の特徴は、対象を限定し、方法論を限定することによって認識の合理性を追求することである。多様な要因を考慮すればする程、曖昧性を持ち込むことになるので、従来それを敢えて避けてきたともいえる。3.11は「ディシプリン」的認識の脆さを示すことになった。

学問の「社会化」「公共性」の重視

一方、現実の課題は、もっと錯綜していて、多くの「ディシプリン」が関わってはじめて解決可能である。そこで、課題による教育の分野分けをして、課題対応の人材を育成する、ということが近年高等教育の目標として掲げられることが多くなってきた。これが、「学位の多様性」の問題として現れている。つまり、学問に「社会化」もしくは「公共性」の要素が意識されてきたというのが、21世紀の特徴である。教育の側面から言えば、「世界への関与の仕方」が重視されるようになってきた、ということである。

学問の新たな「普遍性」

これまでの学問の研究と教育に、分野に依らない普遍性があるとすれば、「知識の創造」、「知識の継承」という営みを「ディシプリン」において行う仕方にある。各「ディシプリン」では、それぞれの「ディシプリン」の対象と方法論を限定することで、その営みを意味あるものとしてきた。しかしながら、21世紀においては、これに加えて「知識の社会化」もしくは「知識の公共性」ということが重要な意味をもつことになってくると、従来の「ディシプリン」中心の学問の営みを超越する必要がある。出てくる。

「課題」による分野分けの問題点

学位に付す分野として、従来型の「ディシプリン」中心ではなく、「課題」中心の分野分けをしていることが、近年の特徴で、名称上の多様性が著しくに増大してきている。しかし、実際に「課題」中心の教育プログラム、もしくは研究プログラムを実行する際には、「ディシプリン」によって培われてきた「認識の合理性」を踏まえていくとともに、それを超越する仕掛けの両方が必要であって、「課題」だけでは、解決へ道筋が見えて来ない。「世界への関与の仕方」と「世界の認識の仕方」を基本に据えることによって、限定的な「ディシプリン」の知見を用いつつも、「ディシプリン」間を越境することになるのではないかと考える。そのためには、明確な課題設定と、「ディシプリン」越境の仕組みをもつことが必要である。

結論

学位表記において、「課題型」の名称を付す場合には、「世界への関与の仕方」、「世界の認識の仕方」に加えて、関わるディシプリン間を越境する仕掛けが背後にあることを自覚的に意識することが重要である。